# 追跡

佐久間緑は、一月の午後の渋谷駅の雑踏を前にして、もう十分ほど前から人の流れに視線を注いでいた。

左手に東横線と地下鉄銀座線の乗り場へ続く階段を見、右手にはTデパートへ上るエレベーターを見ながら、彼女は交錯する人々の流れの中に、「青い帽子」を探していた。それを被った女性が、緑が首に巻いているピンクのマフラーに気づいてこちらへ向かって来れば、その人が「中野翔子」であるはずだった。事前のメールでの打ち合わせで、その点は確認してあった。

右手のエレベーターの扉が開いて、買い物客の一団が吐き出される。それぞれが思いの方向に歩いて行こうとするが、その時ちょうど左手の階段から押し寄せてきた人々の流れに、行く手を遮られる。が、人々は一瞬、立ち止まったり、横に避けたり、小走りになったりしながら、不思議なほどぶつからずに混じり合い、雑踏の中に同化していく。

と、緑は、自分の正面の二十メートルほど先にある喫茶店から、紺色の毛糸の帽子を被った女性が出てきて、ハチ公前広場へ続く通路に向かって歩き始めるのを見た。

「紺色は青の一種だ」と思った緑は、その人の後を追った。

緑は、靴底を鳴らしてその女性に追いつこうとするが、混み合った通路で人を追い越すのは難しい。それでも五、六人を追い抜いて、やっと紺色の帽子の後ろについた時、ＪＲ山手線の改札口付近まで来ていた。

「すみません」と緑は言いながら、その女性の薄茶色のコートの肩を軽く叩いた。「ちょっと、失礼ですが……」

紺色の帽子の女性は、振り返って緑を見た。

「何でしょう?」驚いた表情に、警戒感が滲んでいる。

「あなたは中野翔子さんですか?」と、緑は言った。

その女性は、少し怪訝（けげん）な表情をしてから「いいえ、違います」と言った。

緑はさらに「メールでお話した佐久間ですけど……」と続けたが、女性は首を何度も横に振りながら先へ行ってしまう。後に残された緑は、その場に少し立ち止まってから、踵（きびす）を返して、同じ通路をもといた場所へ向かっていった。

相手とは初対面なのだから、人違いがあっても不思議はない。が、目的の人に会えないのは困る、と緑は思う。これまでの努力が無駄になるのは嫌だった。せっかくいい人を見つけだし、その人と親しくなれるかもしれない機会を失うのは「つまらない」と思った。

佐久間緑は、ちょうど一週間前の朝のラッシュ時に、ＪＲ山手線の新橋駅の階段を上りながら、前を行く人々の脚の間をすり抜けるように、何か銀色に光るものが落ちて硬質の音を立てるのに気がついた。とっさに「携帯電話だ」と思って手を伸ばし、それを頭上に振り上げて「ケータイ落としましたよ！」と叫んだが、人の流れは止まらず、また誰も緑の方を振り向いたり、近づいて来ることはなかった。緑はすぐ、それを落し物として駅に届けるつもりだったが、その日は寝過ごして始業時刻に遅れそうだったし、拾った電話は、自分がちょうどほしいと思っていた最新の機種だったので、半日触らせてもらってから、帰宅時に駅に届けても構わないだろうと考えた。

昼休みの時間、会社の同僚五人と食事をしながら各自のもつケータイの話となり、緑は「最新型を持っている」と言ってしまった。自分のものではないが、「持っている」ことは嘘ではなかった。メカ好きの新藤速雄が見たがるので、「見るだけよ」と言って渡した。すると速雄は、それを皆に示しながら、まるでセールスマンのように新機能の講釈をやってのけた。「ずいぶん詳しいのね」と緑が言うと、速雄は「給料日が来たら買うつもりだからね」と言って胸を張った。

実は、緑もこの種の機械には目がない方だった。特にケータ

イとパソコンを使った情報交換には、かなりはまっていた。友だちとの会話や仕事上の連絡に利用するだけでなく、自分のメモや手帳代わりにもよく使った。事務所で仕事中も、街を歩いている時でも、何かよい発想が浮かぶとケータイでメモをする。また、何か面白いものを見つけると、ケータイに付属したデジタルカメラで写真を撮る。そして、それらを自分のパソコン用のアドレスに電子メールで送る。夜、家に帰ると、パソコンで昼間のメモを受け取り、それを加工したり、整理したり、内容をふくらませたりしながら、自分の日記のようなものに仕立て上げるのである。

「日記」というよりは「発想箱」と言った方がいいかもしれない。日記は、日常的な出来事を記録するのが主体だろうが、緑の場合は、そういう記録もするが、新しい思いつきや、仕事と関係がありそうなヒント、新聞記事やニュース、あるいは友達との会話の中から飛び出した発想などもすべて記録しておく。それが案外、仕事に役立つことがあるのだった。

速雄の説明を受けるまでもなく、緑は今度出た新世代の携帯電話には、音声認識機能があることを知っていた。これは特筆すべき進歩だった。パソコンではすでにこの機能をもった機種が存在していたが、携帯電話に装備されたのは初めてだ。これ

を使えば、声によって文字を入力できる。つまり、親指を酷使してメールを打たなくても、声によってメールの文面を楽に作成できる。思いついた時に、声でメモを取っておけばいいのである。メーカーはこの機能を「ボイス入力」と呼んで、新機種の目玉にしていた。

昼食が終ると、緑は理由をつけて会社の同僚と分かれ、一人で喫茶店に入った。そこで早速、「ボイス入力」を試してみるつもりだった。他人の機械ではあるが、テストぐらいなら許されるだろうと思った。この機能を使うためには、持主が自分の声を機械にあらかじめ登録しておかねばならないことは、速雄の説明を聞いて知っていた。この手続きさえ踏めば、あとは普通に電話で話すように声を出せば、機械が自動的に音声を文字に変換してくれるのである。ただし、登録できる声は一人分だけである。だから、そのケータイの持主がすでに自分の声を登録してあれば、緑が新たに声を登録し直すことはできないのだった。

緑は、速雄の説明を思い出しながらケータイを操作し、液晶画面に「音声登録」と表示させた。それを選択すると「暗証番号」を入力する画面に変わった。彼女はデタラメに四桁の番号を入れてみた。すると案の定「暗証番号が違います」と画面に

出た。ということは、持主の音声がすでに登録されていて、それは暗証番号が分からなければ変更できないということになる。

「そうか……」と緑は溜息をついた。それから、カーソル移動キーを無造作に何回か押してみた。すると今度は「ユーザー情報」と出た。これは恐らく、持主の氏名やメール・アドレスなどの個人情報のことだ。当然、暗証番号によって鍵をかけられているはずだ。彼女は構わずそれを選択した。すると、以前と同じ暗証番号の入力画面に変わった。持主の暗証番号が分かるはずはないが、緑はその時、ふと機械を裏返してみた。自分がケータイに暗証番号を設定する方法を、ここでも試してみる気になったのである。

それは、それぞれのケータイについている固有のシリアル番号を利用する方法だった。番号をそのまま使うのではなく、先頭や後ろから一つ置きとか二つ置きに使ったりする。比較的単純な方法だが、結構有用だった。当節は銀行や証券会社だけでなく、インターネット上の商品の注文にも暗証番号やパスワードが要求されるから、それらをすべて別の番号にしていては、とても憶えきれない。いきおい同じ番号を多用することになり、安全性の面で不安が残る。しかし、シリアル番号を利用する方

法では、番号の入力時にその機械を調べればいい。だから、暗証番号を憶える必要もなく、入力ミスも少ないのだった。

「でも、このケータイの持主は、まさか私と同じ方法を使ってないでしょうね……」と思いながら、緑はちょこちょこと指先で番号を入れてみた。ダメでもともと、という気分だった。

三回目の番号の組み合わせで画面がプツンと変わった。緑は最初、入力間違いが三回あったので、機密保護のためにケータイの側で機能を停止したのかと思った。が、画面には人の名前が出ていたのである。

「中野翔子」

その下に続いて、機械に割り当てられたメール・アドレスと電話番号も表示されている。緑の鼓動は高鳴っていた。開けるつもりじゃなかったのに偶然、簡単に金庫の鍵が開いてしまった——それと似た驚きが彼女を包んでいた。

緑は、喫茶店の中で恐る恐る周囲を見回した。店内の席は七割方が埋まっているが、下を向いて本を読んだり、新聞を拡げたり、自分のケータイを覗き込んでいる客が多い。誰も、自分に注意などしていなかった。緑は、自分が次に何をするか考えるのが恐ろしかった。自分のケータイの中に何が記憶されているかを思い起こせば、この「中野」という人の機械の中身も想

像できる――友達やボーイフレンドの電話番号やアドレス。何日にも及ぶお互いのメールのやりとり。自分用のメモ。自分の顔写真。彼や友達のスナップ写真。キャッシュカードの暗証番号。インターネットで使うパスワードのリスト。買い物リスト。仕事のスケジュール。買いたい本やＣＤ。見たい映画やＤＶＤ――そういうすべてを他人が勝手に見たとしたら……。

緑はケータイを急いでハンドバッグに押し込むと、勢いよく立ち上がった。木製の椅子が床の上で大きな音を立てたので、近くにいた客が二、三人、驚いた顔をして彼女の方を見た。午後の仕事の時間に遅れまいと、緑は早足で会社に向かった。

佐久間緑は、その日の夜、拾ったケータイを駅に届けずに自分のアパートへ持ち帰った。中野翔子のことがもっと知りたくなり、パソコンのスイッチを入れ、検索サイトにつないで、「中野翔子」の名前で調べてみた。該当するサイトは二十五カ所出てきた。その中で、個人が運営しているホームページが九カ所あった。緑は、拾ったケータイの中に入っていた写真のうち、どれが中野翔子なのかを知りたいと思ったが、九カ所のホームページをすべて調べても、ケータイの中にあった写真と似た女性は見つからなかった。注意深い女性なのかもしれない、と緑は思った。

次に緑は、個人のホームページをもっている九人の「中野翔子」宛てにメールを出してみた。「〇月〇日の朝、新橋駅でケータイを落としませんでしたか?」という短いメールである。持主の名前がなぜ分かったかという説明のためには、「落とした時に機械がおかしくなったのか、所有者の情報が簡単に表示されてしまった」と嘘を書いた。すると二日後に、九人のうち一人から「自分が落とした」という返事が来た。そこで、その人と何通かのメールのやりとりをした結果、一週間後に渋谷駅でケータイを返す約束をしたのだった。

この一週間で、緑は中野翔子のことをよく調べた。彼女のホームページによると、この人は三十代前半のコピーライターで、若い女性向け月刊誌に料理や菓子づくりに関するエッセーも書いていた。料理がうまくなりたいと思っている緑にとって、尊敬に値する人だった。緑は、翔子のホームページに掲載されているレシピーを参考にしてチーズケーキを作ってみたが、とても成功したとは言えなかった。今度会った時に、作り方のコツを聞いてみたいと思った。また緑は、自分がケータイなどを駆使して書いている日記のようなものを見てもらい、それをエッセーに仕立てるための助言もほしいと思った。そしてあわよくば、翔子のケータイに登録されている出版社の編集部員に顔を

つないでもらえないか、と密かに思った。

緑はまた、翔子が雑誌に書いたエッセーを読んで、彼女の関心や物の考え方を知った。コピーライターという職業から想像するよりは結構、堅実な考え方をしている人のようだった。また性格も知ろうと思い、緑はケータイに登録されていた翔子の音声ファイルをパソコンに複写し、インターネット上で「声紋」を分析するサイトへアップロードした。一件五千円で、すぐに分析結果をメールで送ってくれた。それによると、翔子は「明るく思慮深いが、男性には注意過剰の傾向あり。女同士の友達は多くないが、親しくなれば面倒見はいい」などと書いてあった。

緑が、渋谷駅の待ち合わせ場所から家路に向かったのは、約束の時刻から一時間もたってからだった。中野翔子は来なかったのだ。緑は、自分のケータイから何度も翔子にメールを送ったが、その返答もなかった。

翌日、緑は翔子のエッセーを載せている雑誌の出版社に電話し、彼女の連絡先を尋ねた。電話に出た女性編集者は、少し考えてからこう言った。

「あー、もしかして、中野翔子という人のホームページを見たんですか?」

緑がそうだと言うと、編集者は続けた。

「あれはニセ者なんです。顔写真がなかったでしょう？　成りすましって言うんですか？……レシピーなんかもいいかげんで、ウチも迷惑してます」

Masanobu Taniguchi

電子署名者：
Masanobu Taniguchi
DN: cn=Masanobu Taniguchi, o=Seicho-No-Ie, ou=Vice President, c=JP
日付：2003.02.14 12:07:02 +09'00'
理由：この文書の著者
場所：Tokyo, JAPAN

署名は検証されていません。